

国際交流基金日本語国際センター・政策研究大学院大学・国立国語研究所  
 連携プログラム

日本語教育指導者養成プログラム修士コースについて

日本語国際センター 研修事業課・正野圭治、専任講師・築島史恵

国際交流基金日本語国際センター（以下「センター」）では、2001（平成13年）年9月から、ODA対象国（ただし、中国は別プログラムで対応しているため現在対象としていない）の日本語教育機関の現職日本語教師もしくは日本語教授経験者を対象として、「日本語教育指導者養成プログラム修士コース」を開始した。現在、6か国から8名の学生が、本コースの第1期生としてセンターに宿泊し、文字通り、日夜、勉強に励んでいる。本稿では、この新たに開設された修士コースの目的や内容を紹介するとともに、2003（平成15）年度の学生募集についても解説する。

コースの目的

本コースの目的は、日本語教育専門家として、日本語に熟達し、日本語教育において優れた指導能力を持ち、かつ日本の社会・文化全般にわたって理解があるような、その国において将来日本語教育の指導者となるべき人材を養成することである。その目的を達成するために、外国人日本語教師に対する日本語教育の実績を有する「国際交流基金日本語国際センター」、言語学・国語学等の学問的研究機能を有する「国立国語研究所」、政策研究における文化に関する教育研究機能を有する「政策研究大学院大学」の3機関が連携してこのコースを運営している。

コースの概要

本コースは、日本語教育における高度で実践的な学位プログラムとして1年間で日本語教育の修士課程を修了するもので、主な修了要件は、以下の2点である。

- (1) 単位取得  
「言語」、「言語教育」、「社会・文化・地域」の3領域において、必修28単位を含む36単位以上を取得する。
- (2) 特定課題研究  
1年という時間的制約のため、修士論文に代えて、特定課題研究（後述）を課す。



研究会での第1期生の発表「自国の日本語教育を語る」

学位の認定は、国際交流基金日本語国際センター、国立国語研究所、政策研究大学院大学の3機関のプログラム担当教授で構成される委員会が行い、この委員会で認められた研修生には、修士号[日本語教育]が与えられる。

カリキュラム

学期は4学期制で、各学期と学期の間に1週間程度の休暇期間があるが、通常2年間かかる修士課程を1年間で修了するため、スケジュールは大変厳しい。

- (1) 授業  
授業の年間カリキュラムは以下の通りである。

学期名	秋大学期（16週）				冬小学期（8週）		春大学期（16週）				夏小学期（8週）	
時期	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
「言語」領域科目	日本語表現 日本語表現演習 日本語学 日本語学 *社会言語学				*日本語表現 *対照言語学		*言語学概論 *認知言語学・心理言語学					

# 日本語教育指導者養成プログラム修士コースについて

にほんごきょういくしどうしやうせい

しゅうし

「言語教育」 領域科目 りょういきかもく	日本語教育概論 にほんごきょういくがいろん 日本語教授法 にほんごきょういくじゆほう	*日本語教育評価法 にほんごきょういくひやうかほう *日本語教育教材・教具論 にほんごきょういくきょうざい きやうくろん *日本語教育情報メディア論 にほんごきょういくじゆほうろん 第二言語習得研究 だいにげんごしゅうとくけんきゅう 日本語教育演習 にほんごきょういくえんしゅう	日本語教育実習 にほんごきょういくじしゅう	教師教育論 きょうしきょういくろん (実際は通年科目) じっさい つうねんかもく 日本語教育演習 にほんごきょういくえんしゅう 日本語教育特定課題論文 にほんごきょういくとくてい かたいりんぶん (上記2科目から選択必修) じょうき かもく せんたくひっしゅう
「社会・文化・地域」 領域科目 りょういきかもく	日本の歴史と文化 にほんのれきしぶんか	現代日本の社会と経済 げんだい にほんのしゃかい けいざい *異文化コミュニケーション いぶんか コミュニケーション	比較文化論 ひかくぶんかろん *現代文化分析演習 げんだいぶんか ぶんしきえんしゅう	
単位数 たんいすう	必修：14 選択：2 ひっしゅう せんたく	必修：6 選択：12 ひっしゅう せんたく	必修：4 選択：6 ひっしゅう せんたく	必修：2 選択必修：4 ひっしゅう せんたくひっしゅう

(単位数はすべて1科目2単位 \*は選択科目)  
たんいすう かもく たんい せんたくかもく

## (2) 特定課題研究

とくてい かたいりんぶん

特定課題研究は、原則として、来日前より自国および自分の現場の問題点や課題を踏まえて各自が設定してきたテーマについて行う。来日後、秋学期と冬学期には、プログラム担当教授および研究指導教官(学生1名に主担当・副担当2名の研究指導教官がつく。)から指導を受けながら先行研究や研究方法について検討し、春学期には、原則として3週間程度、自国に戻って実習や調査研究を行う。この一連の研究計画から実習や調査結果の考察までを、春学期の残りの時間と夏学期に、レポートあるいは論文としてまとめて提出する。

2001年度、一期生の研究は、以下のようなテーマで行われた。

ねんど いっせい けんきゅう

学生名 がくせいめい	国籍・所属機関 こくせき しょじゆきかん	研究テーマ けんきゅう
Yuddi, Adrian Muliadi	インドネシア(北スマトラ大学) いんどうねしあ(きたすまとらだいがく)	北スマトラ大学の学習者に対する日本語の敬語の指導法 きたすまとらだいがくのがくしゅうしやにたいしてにほんごのけいごのしどうほう
PANYO, Teerat	タイ(チェンマイ大学) たい(ちえんまいだいがく)	事実文と主張文の読解比較 - タイ人のための読解教材作成に向けて - じじつぶん しゆちやうぶん のとくかいひかく にほんごのどっかいざいさくせい
DE VERA, Lorna Velia	フィリピン(フィリピン大学) ふりりん(ふりりんだいがく)	フィリピンの大学レベルの日本語教師と学習者による自律学習の意識化 ふりりんのだいがくレベルのにほんごきょうしとがくしゅうしやによるじりつがくしゅうのいしきか
HASPARINA, Abdul Ghafar	マレーシア(マレーシア工科大学) まらेशあ(まらेशあこうだいがく)	フォント配信技術を利用した Web 漢字教材の開発に関する教育工学的研究 ふんとはいしんぎじゆつ りやうかんじしよざい かいぱつ かんきょういくこうがくてきけんきゅう
YEOH, Lee su	マレーシア(マレーシア科学大学) まらेशあ(まらेशあがくだいがく)	コミュニケーション・アプローチに基づく授業における視聴覚教授メディアが学習者の学習意欲に与える影響 コミュニケーション・あぷろーちに基づくじゆぎょうにおけるしきんかくきょうざいメディアががくしゅうしやのがくしゅういよくあたえいあき
ZUBAIDAH, Binti Ali	マレーシア(マラヤ大学) まらेशあ(まらやだいがく)	マレーシア人日本語教師向けの文法手引書の作成 まらेशあじん にほんごきょうしむ ぶんぽうてひきしよ さくせい
PANDA, Nabin Kumar	インド(デリー大学) いんど(でりーだいがく)	インドにおける日本語教授法 - コミュニカティブ・アプローチの導入への展望 - いんどにおけるにほんごきょうじゆほう - コミュニカティブ・あぷろーちのどうりゅうてんぼう
MATSUZAKE, Cristina, Sanae	ブラジル(松の実学園) ぶらじる(まつみ がくえん)	在日10代ブラジル人の親子のコミュニケーション - 言語生活と心の問題 - ざいにちだいいんあやこ げんごせいかつこころもんだい

## コースの状況

じやうきやう

### (1) 初年度についての所感

しよねんど

初年度もあと2ヶ月ほどとなり、学生達は既に必要単位数を取得して、最後の研究の仕上げに、連日遅くまで研究室に閉じこもっている。一期生は比較的長い教授経験を持つ教師が多かったこともあり、この特定課題研究のみならず、コース内の各授業においても、現場を踏まえた具体的な議論が重ねられた。これが、日本の他の日本語教育関係の大学院とは異なる、このコースの大きな特徴の一つとも言えよう。つまり、既にしっかり自分の教授現場を持った教師達が今一度学生として集うことで、その自分の現場を念頭に置きながら、視野を自分の所属する機関から地域、国、そして世界へと広げること、その中で自分がしなければならないことや将来果たすべき役割を見出すことが、この「指導者養成プログラム」の目標である。もちろん、そのためには、自分の授業を上手に行うことができる力や自分の研究を深めていく力を養うこともおろそかにはできないが、それに留まらず、例えば、常に自ら得た知識や情報をまわりにも発信したり、まわりの状況をできるだけ広く客観的に把握したり、更には異なる立場や考え方の他の教師達とも積極的に関わっていくといった、リーダーならで



日本語教育指導者養成プログラム修士コース第一期生  
にほんごきょういくしどうしやうせい しゅうし だいいっせい



課題に取り組む(修士コース研究室にて)  
かたいとく しゅうし けんきゅうしつ

この姿勢をも同様に身につけてほしいと考えている。今年度も、そうした機会が、授業内外で様々な設けられた。そして、初年度の学生達は、そういう意味でも、その機会に主体的に関わり、知識面に加えて、将来、それぞれが現地の日本語教育指導者となりうる力を育み、大きく成長したと感じている。

(2) 今後の計画

来年度(2002年度)の参加予定者の国籍と所属機関は、以下の通りである。

参加予定学生名	国籍	所属機関
TUMURBAT, Boldbaatar	モンゴル	モンゴル国立大学
DANG, Tram quynh	ベトナム	ドンドー日本語センター
YONG, Bebe Siew Fong	マレーシア	Sekolah Menengah Sains Kuching
ANG, Chooi kean	マレーシア	Sekolah Menengah Sains Pokok Sena
GARCIA Susana Maria	キューバ	ハバナ大学外国語学部
ENDO Cristina Maki	ブラジル	ブラジル日本文化協会
STOLYAROVA Yuliya Vitalievna	ウズベキスタン	タシケント国立東洋学大学
SHADAYEVA Madina Tinishbekovna	カザフスタン	カザフ民族大学
NIKOLENYI Gergely	ハンガリー	テレースヴァーロシュ2ヶ国語高校

表からわかるように、初年度とは、国籍も所属機関(教授対象)も、異なった新しいメンバーが参加することとなる。今後、このコースが発展するにしたがって、様々な国から様々な背景を持った教師達が参加することとなる。しかし、いずれにしても、上述の特徴を生かしたコース運営に加えて、今後は、このコースに参加して帰国する教師達が、滞在中に得る知識や考え方、視点、そして人とのつながりを十分に生かして、将来、現地の日本語教育界で活躍していけるような支援体制も整えていく必要があると考えている。例えば、このコースの研究会の立ち上げやホームページの作成など、彼らとのつながりをコース参加中の一年にとどまることなく続けられるような場の提供を考えていきたい。一方で、一期生自身も、コース参加者OB・OGを中心とした、将来的なネットワーク作りを検討している。

これから、年々輩出されるであろう修了生達が、自分の基盤をしっかりと見据えた上で、このコースを一つのステップとして、大きく飛躍してくれることを強く願っている。

来年度のコースの募集について

コースは9月に開始し、翌年の9月に終了するが、募集はその前年に行われるため、これから応募できるのは、2003(平成15)年9月に開始されるコースである。募集要領及び申請書は、2002(平成14)年8月中旬に、基金事務所または在外日本公館に送付されるので、それ以降最寄の事務所または公館に連絡すれば、入手可能である。申請書は2002年12月2日必着で、最寄の基金事務所または在外日本公館に提出のこと。

選考試験・結果発表のスケジュールは以下を予定している。

- 2003年1月末：第1次審査(書類審査)合格者発表
- 2003年2月：第2次審査(筆記試験・口述試験)
- 2003年4月中旬：最終合格者発表

なお、申請者は、以下の条件をすべて満たしている必要がある。

- ODA対象国(中国を除く)で日本語教育関係機関や教育省等の行政機関に属している日本語教師、もしくは日本語教授歴をもつ者、所属機関長の受験許可を得ることができる者。
- 将来、当該国の日本語教育において指導者として期待される者。
- 学士号またはそれに相当する資格を有する者。
- 日本語能力試験1級程度以上の日本語運用力を持っている者。
- 原則として、2002年12月1日現在、2年以上の日

本語教授歴をもつ者。

- 原則として、2003年4月1日現在、満40歳以下の者。
- 過去・現在に日本国籍を有していない者、もしくは日本で義務教育を修了していない者。
- 心身ともに健康である者。

採用者については、センターが以下の経費を負担する予定である。

- 往復国際航空券(原則としてディスカウントエコノミークラス)
- 空港利用税
- 宿泊(センターの宿舎もしくはセンターの指定する宿舎に宿泊する)
- 食事(一部は現金支給)、生活維持費等
- 研究・活動費及び講義に関わる費用
- 海外旅行傷害保険料